

フィギュアスケートの実況放送の談話分析 —地上波放送と有料放送の違いに注目して—

西部 詩織

1. はじめに

今日、様々なメディアが発達し、多くの情報がいろいろな媒体を通して我々の元に伝達されている。しかし、同様のメディアであっても、その性格や条件が違えば伝達のあり方も微妙に異なってくるだろう。

本稿では、そうした事例の一つとして、地上波放送（以下、＜地上波＞）と有料放送（以下、＜有料＞）におけるフィギュアスケートの実況談話の違いを、実況放送に携わっている実況アナウンサーと解説者を中心とした談話を通して分析する。

まずは＜地上波＞と＜有料＞それぞれのフィギュアスケートの実況放送の特徴を挙げておきたい。

日本における＜地上波＞は、日本人が出場する大会をテレビのゴールデンタイムに放送するという特徴がある。これは競技の愛好家以外の視聴者を想定してのことであろう。その多くが録画放送であり、一般的なスポーツ中継とは少々異なる放送形態をとっている。録画であるため、テレビ局独自のVTRを放送することや放送する競技者の選択をすることが可能であり、実際にそのような放送がなされている。

＜有料＞は日本人が出場しない大会でも放送し、生放送と録画放送どちらの場合もある。基本的に＜地上波＞で放送されない大会は生放送であり、録画放送の場合は種目によって主要選手のみの放送であったり練習映像がカットされることがあったりするが、シングル種目（注1）では全選手の演技が

放送されることが多い。

このような〈地上波〉と〈有料〉では、番組作りにおいて、次のような大きな傾向差があると思われる。すなわち、〈地上波〉はスポンサーによって広告効果を期待して提供されるものであるから、視聴率を重視する傾向がある。それ故、競技の愛好家以外の一般視聴者にも広く視聴してもらえるような番組作りがなされると推測される。つまり、一般視聴者にとっても興味を引く、分かりやすい番組作りがなされると思われるのである。

それに対して、〈有料〉は、特定競技の放送を目当てに放送局と視聴契約を結んだ人を視聴者としている。つまり、〈有料〉はもっぱら競技愛好家が視聴するものとして番組作りをしている。それ故、愛好家の関心を満足させるようなより詳しい情報を与えるようなことを意識した番組作りがなされると推測される。

以上のような番組作りの大きな傾向差があると推測されるが、このことから更に、実況にかかわる話者の言語や言語的振る舞いには次のような点で相違が出てくるのではないかと予想される。

第一に、実況アナウンサーの役割と発話量である。実況アナウンサーには、番組を進行する役目があるとともに、解説者の発言の聞き手という役割があるが、〈地上波〉では、もちろんCMも入るし視聴者を飽きさせないようにという工夫という意味もあってテレビ局独自のVTRも入る。そのため、実況アナウンサーはそうした放送の舵をとる「進行役」としての性格が強く、発話量も増えると予想される。それに対して、〈有料〉では、そうしたVTRも入らず（注2）、基本的には大会の映像だけを放送する。放送時間も長く、専門的な実況放送が求められるため、実況アナウンサーは専門的な解説の「聞き手」としての役割が強く、発話量は相対的に少なくなると予想される。

第二に、解説者の専門的な解説の度合いと発話量である。〈地上波〉では、競技愛好家に限定されない一般の視聴者にも見てもらいたいという姿勢で番組作りがなされるので、細かいルール説明や専門用語を多用するようなことは避けられるし、興味をそぎかねないので、失敗した部分について専門的に掘り下げるような言及もあまりなされないものと予想される。その結果、解説者の出番は少なくなり、発話量も少なくなる。それに対して、〈有料〉では、

競技に対してより深い解説が求められるため、解説者の専門的な解説が目立つものとなり、発話量も相対的に増えると予想される。

番組作りの傾向が違うことで、話者の言語や言語的振る舞いについて以上のような相違が出てくると予想されるが、まず、この「予想」が果たして当たっているのか、次の二点を調査することで検証してみたい。

- ・〈地上波〉と〈有料〉における実況アナウンサーと解説者の発話量
- ・〈地上波〉と〈有料〉における実況アナウンサーと解説者のそれぞれの談話の特徴

そして、「談話の特徴」ということを更に詳しく掘り下げて、この「予想」のような点ばかりでなく、それ以外の点でも、上記の“番組作りの傾向差”という推測が当を得たものであることを裏付ける事実があることも指摘する。

2. 調査対象

調査対象であるフィギュアスケートは個人競技であり採点競技でもある。選手が一人ずつ滑走順に演技をするが、この調査においては一人の選手に与えられる時間を「競技時間」とする。

実際の放送では、競技時間の他に滑走グループごとに行われる直前練習や地上波に限りバックヤードの映像なども放送されるが、今回の調査ではテレビ放送された「競技時間」の実況のみを対象とする。調査した放送は表1の通りである。

〔表1 調査の対象〕

地波	大会名	放送日	放送局	競技時間(約)	有料放送	大会名	放送日	放送局	競技時間(約)
A	世界選手権2012	F24.3.30	フジテレビ	2時間0分	E	世界選手権2012	F24.4.10	JpsT4	2時間0分30秒
B	四大選手権2013	H25.2.8	フジテレビ	2時間	F	欧州選手権2013	H25.1.24	JpsT4	4時間
C	2011NHK杯	H23.11.1	NHK	1時間0分	F	全米選手権2013	H25.1.25	JpsT4	3時間
D	2011ロスレウム杯	H23.11.27	テレビ朝日	1時間					

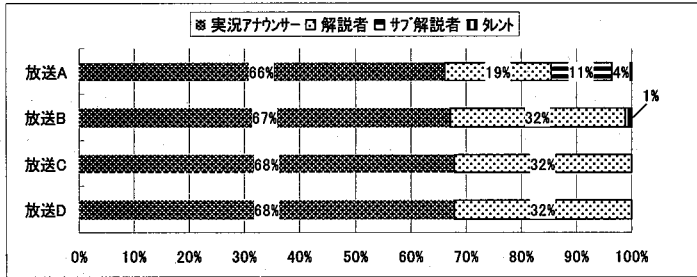
〈地上波〉で放送されたA~Dの大会と〈有料〉のE~Gは全て男子ショートプログラム(注4)の放送を調査している。

なお、放送にかかわる発話者は最も多い場合で四名いるが、〈地上波〉と

＜有料＞に共通する実況アナウンサーと解説者をもっぱら対象として考察する。

3.発話量の調査・分析

ここでは、以下のグラフを参照して＜地上波＞と＜有料＞ごとに発話量を調査していく。図 1.と図 2.は発話者ごとに全発言の拍数を数え、それらをパーセンテージ化している。



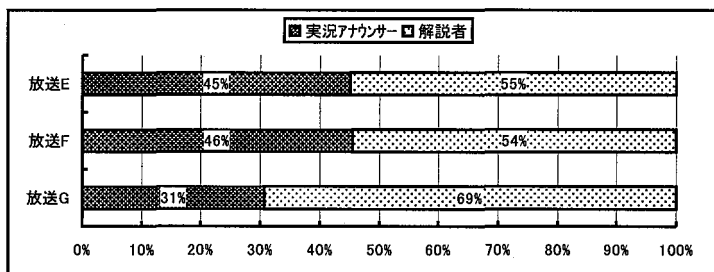
〔図 1.＜地上波＞の発話量割合〕

放送ごとに違いがあるのを見ていくと、＜地上波＞では実況アナウンサーの発話量が全体の 66 から 68%を占めており大きな差は見られなかった。放送 A では実況アナウンサーと解説者のほかに二名が、放送 B は一名が実況放送に携わっているにも関わらず、ここでも実況アナウンサーの発話量の割合は＜地上波＞の他の三つとほぼ同じである。解説者やサブ解説者よりも発話量が多くほぼ一定していることから、＜地上波＞の実況アナウンサーは実況放送の主導権を握って進行していく一定の役割を担っているという予想は裏付けられるものと考えられる。

＜地上波＞の解説者の発話量は、放送 B～D がいずれも 32%、A のみ 19% である。ただ放送 A は、実況アナウンサーと解説者のほかにさらに二名が実況放送に携わっている。四人体制の実況放送は放送 A のみであるため他と少々異なる数値となったものであろう。

＜地上波＞の解説者は専門的な発話が控えられるために発話量が少なくなると予想した。

確かに、図 1 と次の図 2 を比較すると明らかなように、<地上波>では、実況アナウンサーに対し相対的に解説者の発話量は少なくなっている。しかし、これが専門的な発話が控えられたためかどうかについては、発話量の数値だけでは判断できないため、次節で発話内容についてみていく中で判断したい。



〔図 2.<有料>の発話量割合〕

一方<有料>だが、図 2 と図 1 を比較するとはっきりするように、三放送とも実況アナウンサーの発話量の割合が解説者を下回っていることが特徴的である。解説者の競技に対する具体的な発言が多いために実況アナウンサーよりも発話量が上回ったと予想される。確かに実況アナウンサーの発話量は少ないが、「聞き役」がどうかはもう少し発話の内容を見ていく必要がある。解説者についても同様である。専門的な解説が求められるため、発話量が多いと予想した。確かに相対的な発話量は<地上波>の解説者に比べて、はっきりと多くなっていることがわかる。ただ、「専門的な解説」が求められたためなのかどうかは図 2 からはまだ判断できない。

以上、まず発話量の面においては冒頭に述べた予想と合致する結果が得られたといえる。しかし、この量的な結果を当初の予想のように解釈できるかどうかについては、さらに次節でみていくことにしたい。

4. 談話の特徴

ここでは<地上波>と<有料>の発話内容と、発話者ごとの談話の特徴を見ていく。

談話の特徴を考察することで、本稿の冒頭で挙げた実況アナウンサー及び解説者についての予想が成立するのかを検証していく。

4.1. 発話内容

実況アナウンサーと解説者の発話内容を以下のような項目に分類して、次の事柄について考察していく。第一点として、それぞれの項目の発話に占める割合に〈地上波〉と〈有料〉でどのような特徴が見られるのかということ、第二点として、その特徴から本稿冒頭で述べた予想が裏付けられるのかを見ていきたい。

◆発話内容分類項目（実況アナウンサー）

【実況】：その時点で起きている、または直前に予定している事実や状況（競技内容・選手・会場など）についての発言。

【説明】：選手や大会、競技に関して、その時点で起きていない及び過去の出来事についての発言。

【質問】：疑問文として解説者へ向けられる発言。

【相槌】：「ええ」や「はい」、「そうですね」といった相槌及び直前の他者の発言を鸚鵡返しする発言。

【意見】：個人的な感情や意見。

【その他】：上記に当てはまらない発言。中断されたことで意味を成さなくなった発言及び感嘆や感動の言葉など。

◆発話内容分類項目（解説者）

【プレー】：発話時点の競技者の演技・プレーに対する発言。

【選手】：発話時点の競技者自身に関わる発言。

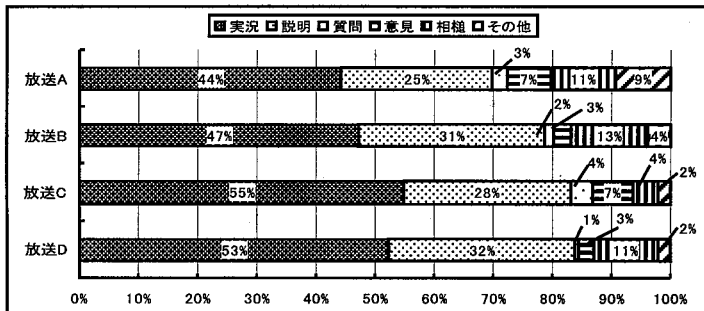
【競技】：フィギュアスケートという競技についての発言。

【相槌】：「ええ」や「はい」、「そうですね」といった相槌及び直前の他者の発言を鸚鵡返しする発言。

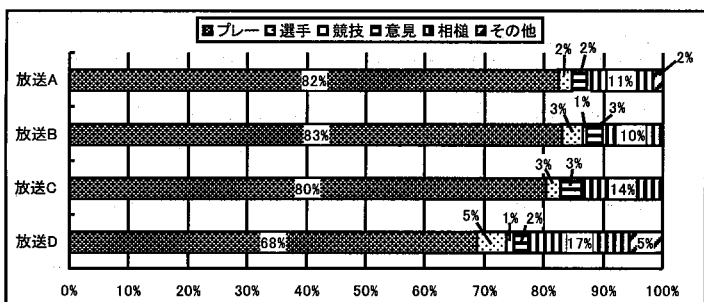
【意見】：個人的な感情や意見。

【その他】：上記に当てはまらない発言。中断されたことで意味を成さなくなった発言及び感嘆や感動の言葉など。

はじめに、＜地上波＞について見ていきたい。図 3.と 4.のグラフは、一センテンスごとに発話の内容をそれぞれの項目に分類していき、その数をパーセンテージ化したものである。



〔図 3.<地上波>実況アナウンサーの発話内容〕



〔図 4.<地上波>解説者の発話内容〕

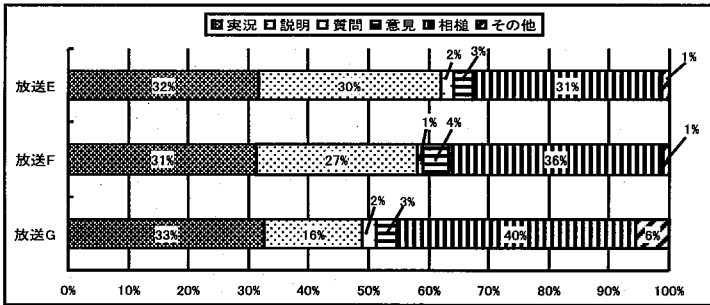
まず、＜地上波＞の実況アナウンサーの発話内容をみていこう。発話全体に占める割合が一番大きい【実況】は、放送 A から D の四放送で放送全体に占める割合が一番大きいことがわかる。今起きていることを伝える【実況】が発話の多くを占める＜地上波＞の実況アナウンサーは、やはり「進行役」としての役割が強いように思われた。

一方、解説者の場合は【プレー】に対する発話が一番多いが、前節でわかったように発話量が少ないため演技やプレーに対して細かな発話が多いとは考えにくい。また、「詳しい解説」がなされているかをみるためには【競技】

の発話も重要であろう。【競技】はフィギュアスケートという競技のルールや技術・精神論を説くため専門的な内容であると言っていい項目である。【競技】の発話が<地上波>では少なく、放送Bで一回、放送Dで二回しかない。

以上より、<地上波>では具体的かつ専門的な解説者の発言が求められる度合は低く、分かり易い実況放送が求められているという予想が裏付けられると判断してよいのではないだろうか。

なお、実況アナウンサーの発話量が多いからといって、<地上波>の解説者は相槌が多い「聞き役」というわけではなく、<地上波>では実況アナウンサーと解説者双方ともに実況放送において基本的な役割である「その時点で起きている出来事を実況及び解説すること」傾向が強く見られる結果が出たように思われた。



[図 5.<有料>実況アナウンサーの発話内容]

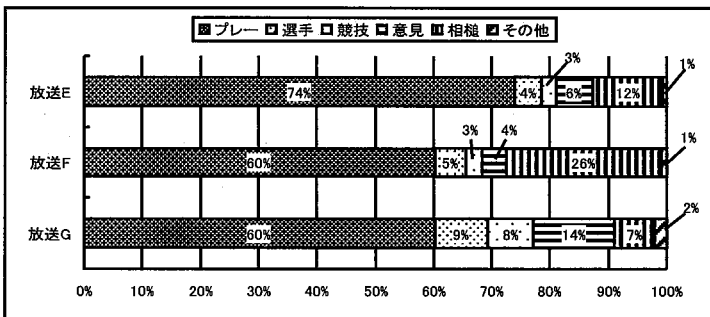


図 6.<有料>解説者の発話内容

一方<有料>では、実況アナウンサーの発話内容が大きく異なっていることがわかるだろう。全体に対して一番割合を占めている項目は放送によって異なるが、【相槌】が【実況】とほとんど同じ割合を占めているのである。<地上波>と較べても分かるように、<有料>の実況アナウンサーの【相槌】は確かに多いといえる。

それに加えて、【質問】の発話にも注目してみると<地上波>では後に掲げる例文1の発話番号41のように(注5)実際に起きた出来事を契機とした実況アナウンサーが解説者へ質問するパターンが四放送合わせて29回中28例と大多数を占めているが、<有料>は例文2のような解説者の発話をきっかけとするものをはじめとする、解説者から深い情報を掘り下げようとする質問が三放送合わせて30回中20回も存在するのである。

前者の質問パターンは、例文1でわかるように「詳しい解説」を引き出そうというよりは「専門家の感想」を聞くというニュアンスが強い。解説者の回答からもそれは感じられるであろう。

後者の質問パターンは、実況アナウンサーが解説者から同一の話題に関してより深い話を引き出そうとする意図が感じられる。

冒頭に挙げた予想で、<有料>の実況アナウンサーは「聞き手」の役割が強いと述べた。

「聞き手」というのは、ただ他者の話を聞いて相槌を打つだけでなく、他者から話を引き出すことも役割の一つであると考ええる。

前節における<有料>実況アナウンサーの発話量が少ないことに加え、【相槌】が多いこと、そして【質問】に解説者から「詳細な情報」を引き出そうとするパターンが多いことを考えると、<有料>実況アナウンサーに対する「聞き手」という役割の予想は妥当なものと考えてよいだろう。

例文 1. (網掛け箇所が【質問】)

C40	解説	「このステップ…前半半分ステップをやっ、片足で滑ってるんですが(ええ)少しバランスを崩したところが、残念でしたね。」
C41	実況アナ	「このレベルの高いスピンはいかがでしょうか?。」
C42	解説	「非常にポジションもきれいに、決まってますし回転が速いですね、よかったですと思います。」

例文 2. (網掛け箇所が【質問】)

F1547	解説	「あの凄く高さがあつたから、e マークはついてるんですけど(はい)、少しプラスが(うーん)って感じでしたね。」
F1548	実況アナ	「ええ。」
F1549	実況アナ	「先にプラスがあつて、まあそのマイナスがあつてもまだ残ってる感じですか?。」

解説者に関しては、＜地上波＞同様【プレー】の発話が最も多いことがわかる。

3 節における発話量の割合から、＜有料＞の解説者は発話量が多いことが判明していたが、その内訳として第一に【プレー】の発話が多いことは、演技や選手に対してより詳しい解説がなされていたとみなしてよいであろう。第二に、【競技】の発話割合が＜地上波＞と較べて大きいことから、競技に関する詳しい発話も＜有料＞では確認できるということである。

発話量の多さに加えてこの二点を以て、＜有料＞の解説者は専門的な解説をしているという予想が裏付けられると判断してよいと思われる。

4. 2. 具体的な談話の特徴

ここまでの発話量と発話内容の調査を通して、＜地上波＞と＜有料＞において各話者がどういった内容の発言をどの程度しているのかが判明したことで、冒頭に述べた予想もほぼ当を得たものであることが判明してきたと言っていよいであろう。それらを踏まえた上で、更に＜地上波＞と＜有料＞の相違について踏み込んで、いくつかの事実を指摘してみたい。そして、それによ

つて<地上波>が視聴者の興味をひく放送内容に、<有料>がより詳しい情報を与える方向の放送を行おうとする傾向があるとの冒頭の推測を確認しておく。

4.2.1 実況アナウンサーの談話について

まずは実況アナウンサーの談話の特徴については、以下のような事実を指摘したい。

まずは例文 3・4 を見ていただきたい。

例文 3.

3-A	A64	実況アナ	「気高く、優雅な雰囲気です。ショートが始まります。」
-----	-----	------	----------------------------

3-A2	A79	実況アナ	「氷上の貴公子というような、そんな印象を持つアダム・リップンですが、最後は激しくこのショートを終えました。」
------	-----	------	--

例文 4

4-A1	A605	実況アナ	「被災した…そしてスケートを、この二つに向き合ってきた1年です。」
------	------	------	-----------------------------------

4-A2	A608	実況アナ	「その想いが届けば、日本[にっぽん]が誇る若き才能に世界は必ず驚くはずですよ。」
------	------	------	--

4-A3	A607	実況アナ	「込めた想いは…日本[にっぽん]へ、そして世界へ届くでしょうか。」
------	------	------	-----------------------------------

この例文 3 と 4 は<地上波>における実況アナウンサーの発話である。有料放送ではこのような発話の一つだったことに対して、地上波では十八件とその数が目立った。

例文 3 の発話番号 64 にある「気高く優雅」や「氷上の貴公子」というフレーズは、競技を知らない視聴者の存在を意識している<地上波>において、

広く一般に認識されている選手の印象ではなく、選手に対してそのようなキャラクター付けを行っているものと思われる。キャラクター付けはフィギュアスケートまたはその選手を初めて見る視聴者に対し、選手と選手の演技や表現の特徴を端的に伝える効果があると推測できる。

その次の例文 4 も同様に「演技前」の発話であり、選手が 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災で被災したことを説明している。発話内容そのものは事実ではあるが、必ず伝えなければならない情報というわけでもない。大変な経験をした日本人選手に注目してもらうための発言であろうが、穿った見方をすればいわゆる「悲劇のヒーロー」という印象を視聴者に与えて興味を持たせるためとも考えられるのである。

この二例は何れも選手に対する先入観を与える発話である。良いか悪いかはさておき、少しでも選手の強みや特徴をわかり易く端的に表現することで、視聴者に対して短時間で選手ひいては放送に興味を持ってもらうためのく地土波>における実況のテクニックとも言えるだろう。次の「選手の戦績」に関する発話にも、そのような特徴が現れている。

例文 5.

A1	実況	「母国の英雄、ブライアン・ジュベールを大歓声が包んでいます。」
A2	実況	「元世界チャンピオンが迎える、初の母国開催の世界選手権です。」
A3	実況	「フランス、ブライアン・ジュベール 27 歳。」
A4	実況	「フランスでの世界フィギュアは、2000 年以来 12 年ぶり。」
A5	実況	「誇り高き元王者。」
A6	実況	「フランスチャンピオンとしてこの舞台に立ちます。」

例文 6.

E1	実況	「さあかわって、地元フランスの選手を迎えます。」
E2	実況	「27 歳にぶりました。」
E3	実況	「ブライアン・ジュベールです。」
E4	実況	「この世界選手権の出場なんですけれども、11 年連続の 11 回目。」
E13	実況	「今シーズンは背中を痛めて、グランプリシリーズを欠場していました。」

E14	実況	「オリンピックの出場はもう3回です。」
E15	実況	「でも、やり残したことがあるということで、彼は4回目のオリンピックを狙っています。」
E16	実況	「世界選手権は2004年…に銀メダルを取りました。」
E17	実況	「そして2006年からは5年連続で表彰台に上がり続けました。」
E18	実況	「2007年の世界チャンピオンです、ブライアン・ジュベール。」

この二つの例文は、ある選手の演技が始まる前の全く同じ場面で発せられた実況アナウンサーの発話である。この競技者についての発話を二放送で見比べてみると、＜地上波＞では競技者の名前よりも先に実績が紹介されている。放送AからDの四放送全体を見ても43名の競技者（実績が「演技前」に紹介されたのは30名）中11名が名前よりも先に実績が紹介されている。

＜有料＞では三放送で放送された63名（実績が「演技前」に紹介されたのは38名）中6名が名前よりも先に実績が紹介されていることを考えてみると、実績を先に紹介することで、その競技者の”強さ”が端的に伝わりやすく、それによって＜地上波＞が想定する視聴者は興味をそそられる可能性が強くなると考えられる。

また、＜地上波＞では選手名を呼ぶ代わりに「○○チャンピオン」や「○○メダリスト」と表現することもあり、「演技前」に紹介されたりそのような場面で用いられたりする実績の種類も、＜有料＞より＜地上波＞も豊富であった。「強い選手」であることを一言で証明する実績と言う名の肩書きが、競技者の名前よりも先にアナウンスされることや選手の名前の代わりに用いられるということは、＜地上波＞に顕著な事例であった。＜地上波＞では視聴者に興味を持ってもらうために情報を判りやすく伝える手法の一つとして、こうした演出やキャラクター付けというべき表現が用いられたのだと思われる。

4.2.2. 解説者の談話について

解説者の談話については次のようなことを指摘しておきたい。解説者の競技や選手・演技に対する談話を以下の6つの型に分類したところ、＜地上波＞と＜有料＞ではあとで述べるような違いが判明した。（なお、《フォロー型》

と《追究》は一つの内容から別の内容について展開するため、「展開式の談話」と呼ぶことにする。)

《フォロー型》：指摘部分→賞賛部分と展開する談話

指摘部分と賞賛部分は異なる演技・要素を対象とする

《追究型》：賞賛部分→指摘部分と展開する談話

指摘部分と賞賛部分は異なる演技・要素を対象とする

《賞賛型》：もっぱら一つの事象を賞賛する談話。多くは成功した演技・要素が対象となる

《指摘型》：もっぱら一つの事象を指摘する談話。多くは失敗した演技・要素が対象となる

《助言型》：失敗した演技・要素についてアドバイスする談話

《分析型》：選手・演技全般・不特定の要素についての談話

第一点は、＜地上波＞における展開式の談話の中では《フォロー型》を使用する傾向が強いことである。例えば放送 A では例文 7 のような《追究型》が二件に対して例文 8 のような《フォロー型》は七件である。一方、＜有料＞の放送 F では《追究型》が十三件に対して《フォロー型》は五件となっていて、＜地上波＞と＜有料＞で型ごとの件数の数字の出方が異なることがわかる。

《フォロー型》を用い、演技の失敗に深く言及せず、良かったところを談話の後半に挙げることは、最終的には「良い演技だった」という印象を与える効果があると思われる。このような効果が＜地上波＞で求められる理由としては、失敗ばかりに言及する実況では視聴者がつまらないと感じ、放送そのものに興味をなくしてしまうことを防ぐためであろう。もちろん、競技としての結果は採点によって明らかになるのだが、「こういうところが凄かった」という解説を聞いているほうが、競技ルールに詳しくない視聴者としても見続ける気持ちを保てるのではないかと思われる。

第二点として、＜有料＞における談話には演技や選手について詳しい談話が展開される《分析型》、《助言型》の使用が見られることである。放送 A と

放送 E を比較したところ、＜地上波＞の放送 A には二つの型に該当する談話は一件もなかったが、＜有料＞の放送 E では《分析型》が六件、《助言型》が四件ある。

もっぱら競技愛好家が視聴することを想定している＜有料＞は、そのような視聴者の関心を満足させるような失敗要素への踏み込んだ談話や演技や選手について詳しく解説することが求められているのであろう。

例文 7.

A84	解説	「そうですねー、やはり3アクセルのステップアウト、そして3ルッツ…この、両手を挙げて跳ぶ3ルッツというのは、彼こしか出来ないジャンプですので(ええ)、ここはしっかり決めておきたいところだったんですが…バランスを崩してしまいましたねー。」
A86	解説	「しかし、ジャンプの失敗はありましたが、スピンやステップなどで加点をもらえるようなポジション・回転速度、ステップも非常によく動いていましたのでそういったところの加点が、点数につながってくると思います。」

例文 8.

F843	解説	「そうですねー、あのージャンプとかは良く出来たんじゃないかな、ジャンプは彼としてはあのアクセル以外はよかったんじゃないかなと思うですよねー。」
F845	解説	「だけど、えーステップとかがああ…彼は楽しんでやってみたいな気はするんですけど(はい)あのレベルが取れるようなエッジワークでは(うーん)なかったような気がしたのと(はい)、やっぱお客さん…てか観客とかジャッジのほうにはあんまりその彼の音楽を利用してるといのが伝わってなかったような気は(うーん)しましたねー。」

5. おわりに

本稿のこれまでの調査・考察で明らかになったことをまとめておく。

- 一、＜地上波＞の実況アナウンサーは放送に携わる人数に関わらず、発話量の割合が一定で高く、進行役としての役割を持つが、＜有料＞の実況アナウンサーは聞き役としての性格が強い。
- 二、＜地上波＞の解説者は専門的な用語の使用は控え、判りやすくポジティブな発話をするが、＜有料＞の解説者は具体的かつ専門的な解説が

もとめられるため発話量が多い。

上記のとおり、本稿冒頭の子想は裏付けられる。そして、こうした相違が出てくる背景には、最初に推測したような地上波＜が視聴者の興味をひく放送内容を志向し、＜有料＞が競技愛好家を意識してより詳しい情報を与える方向の放送を志向するという番組作りの方向性の違いがあることは疑いない。それは、さらに実際の放送内容にみられる 4.2 節で指摘したような特徴・相違となって現れてもいるのである。

フィギュアスケートの実況放送は、テレビという同じメディアであっても、メディアが想定した情報を伝達する対象の性質が異なることで伝達内容に大きな違いが生まれてくる一事例といえる。

そして同様の映像であっても、提示の違いによって映像に伴う談話に上記のような違いが出たということは報告に値する事実であろう。

(2013.9.30 稿)

[注]

- (注 1) フィギュアスケートには五種目あり、そのうち男子シングルと女子シングルがシングル競技にあたる。
- (注 2) 放送の中では CM も流れるが、製氷や直前練習、一つの滑走グループの演技が終了したあとの時間といった、大会中の競技以外の時間を利用して放送される。
- (注 3) 放送 E は放送 A と同一大会で、放送 A で放送されたのと同じ競技時間の分を実況放送の調査対象とした。
- (注 4) ショートプログラムとは、フィギュアスケート競技会のプログラムを構成する一つである。他にフリースケーティングが存在し、ショートプログラムの方が先に行われる。
- (注 5) 例文内に用いている記号の凡例は以下の通りである。
 - ? : 疑問文
 - ?? : 相手の発言や事柄の確認をしている発話の語尾に付ける。(例文 1-E666)

(): 他者の発話中に発せられた特別意味を持たない相槌に類する発言を、他者の発話内の一番近い箇所に入れる。(例文1・E665)

下線: 発話音声の重なり箇所につける。(例文1・E666,667)

例文1.

発話番号	発話者	発話内容
E665	解説	「ですから、あのー、今みたいにその気持ちが(ええ)その例えば <u>おま</u> なきやっていったところ(はい)…ていうかそういう気持ちに多分 <u>なら</u> よんだと思うんですね。」
E666	実況	「 <u>ならない</u> ? ?。」
E667	解説	「 <u>ええ</u> 、ええ。」

○ : 聞き取れなかった箇所に拍数分付ける。(例文2)

例文2.

E447	解説	「まあそれと、やはりあの…今までの高橋選手から較べますと(ええ)、そのこの表現とか○○○ <u>躍り</u> と(はい)いますか(はい)振付けと(はい)いますか(はい)、まあこう <u>い</u> ったところがですね、荒さがとれてきましたね。」
------	----	--

* : 中断された箇所と、その発話を中断することになった発話の冒頭につける。

中断することになった発話は、中断された発話のすぐ下の別の枠に入れる。(例文3)

例文3.

F193	実況	「そうですね、あとスピゲがちゃんと*ね、レベル取れないとかね、そうですね。」
F194	解説	「*はい、回ってなかったとか。」

[] : 読み方が複数ある表記の後ろにつけて〔 〕内に読み方を記す。(例文4.)

例文4.

H224	実況	「グループ4〔フォー〕に入りました。」
------	----	---------------------

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2007) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金 基盤研究B(2)研究成果報告書
- 伊藤彩花 (2010) 「プロ野球中継における実況の談話分析」『語文』(日本大学国文学会)

(龍谷大学文学部日本語日本文学科 2013年3月卒業)